俳諧九時間

（俳諧ひともし頃）（三）

知十坊毎日新聞紙上に俳諧ひともし頃と題して、始めて秋声会席上の記を物せしに、いとおもしろしとて、其二を国民新聞に掲げしは無黄なり。

十一月二十四日例会を例の所神田の聴雨窓に開く。此日の記は我にと人に嗾され、然らば一話一言らしきもの少しばかり書かむと思立つ。午後一時より夜の十時に至りしをもて、俳諧九時間と題す。

集るもの十二畳の間に十九人、六畳の次の間に七人、極めて盛会なり。

宿題は蕎麦湯、冬の海、胼の三題にて句数二百四十。並に即吟五題、笹鳴、室の梅、神楽、氷柱、喰積、此句数総計三百二十の衆議判と開巻あり。

席の中央に五枚の塗盆を並べて、それに一々題を記したるに、各句を得る毎に句箋を拈りて之に投ず。二時間ばかりの後は雪の積れるやうになる。執筆三人息をも継がず浄書す。

竹冷顧みて曰く「君方は注意して清書をして下さいよ。此秋声会の大人方の句は強ち十七文字とは極らぬのですから、字が余つて居たとて、手前勘で口調の好いやうに約めたりなんぞしたら大事ですよ。」

一句奇警、座中頭を掻くもの一時に四人。無黄が冬の海に「北斗の光斜なり」の吟あり。期雲りをるにして戴かむと云ふ。洒竹るると改めたるに何の手柄かあらむと難ず。期雲るにあらざれば景色大きからずと固く主張す。甲賛し、乙駁し、座中沸騰す。飯人和解して物別となる。

次いで胼の論起る。祖柏が句に上五文字「胼男」とあり。紅葉語を成さずと難ず。無黄は、聞ゆるゆゑに許すべしとて、其例に蜘蛛男、髯男などの語を引く。是も一場の紛議となりしが、姑く措きて、吟声を続ぐ。やがて「胼女」と詠みたる句出づ、紅葉大に驚く。句主は金升なり。それで夫婦が出来ました、と無黄大得意の色あり。

未だ幾ならずして「胼娘」と作れる句顕はる。ヤア娘が出来た、と紅葉呆るゝ。句主出乾なり。

洒竹は上戸なり。此席の曾て酒を出さゞるを苦みて、内君を口説きて窃に一盃の冷酒を乞ひ、揚々人に誇りて、此より佳句湧くが如くならむと、更に一盃を需めて、漸く酔を発し、為に句成らずして、席上随一の遅吟となる、而も駄句なり。

竹冷海舟居士を病中に訪ひて、秋声会の為に一句の揮灑を需む、

●諂はぬ枝頭つよし梅の花

烏黒画を好くす。添ふるに墨梅を以てして、此夕絹本を送来る。祖柏の曰く、勝伯の句を作るは人知れども、杉聴雨様もやりますよ。各聴かむことを望む。祖柏吟じて曰く、

●ソツプにもならぬ親父の肋かな

衆絶倒す。

知十坊嚢に「俳諧ひともし頃」を毎日新聞に掲ぐ。中に会員の辨当を評して、無黄は麺包、松江は竈河岸を持来ると書きしを、或人難じて、

「知十様竈河岸が持つて来られますか。」

「まづ那麼が談林でせうかな。」

鳴く鳥の声も云々の句を吟じて、文台句主を問ふ、応ずるもの無し。それぢや欠席裁判ですか、と執筆をして其句箋を撿せしむ、山渓と署したり。山渓は文台の側に在るなり。文台其袖を牽いて、

「山渓様、あなたの御句ですよ。」

「いゝえ、如何いたして、私ではありません。」

句箋を見るに及びて、

「なるほど是は僕の書いたのだ。ぢや僕ですかな。」

文台曰く「裁判所で作へる句なんぞと云ふものは大方こんなものですよ。」山渓は辨護士なり。

烏黒宿題の絣の字を餅と見誤りて句作せしが、後に絣の字と聞き、慌忙しく改作して投吟す。開巻に及べば、其句あかゞりなり。

十時を打ちて、連衆帰る。知十、飯人、四丁と我とは残りて、更に茶を煮て焼芋を吃ひ、半時ばかり談じて帰る。途中に口占あり、

●俳諧のまだ宵ながら月氷る

【明治28年12月2日「読売新聞」】